

「自閉症」理解と支援キャンペーン 一般市民 アンケート調査報告書

～ 自閉症の認知と理解について～



(社)日本自閉症協会 北海道支部 道南分会

調査報告の概要

1. 日本自閉症協会 北海道支部道南分会の紹介、アンケート調査の目的、協力機関名
2. 全回答者の回収率・年代と性別・回答者の区分、全体～自閉症の捉え方と理解について
3. 一般の人～回答者の自閉症の捉え方と理解について
4. 調査からみえてくる道南分会の現状と今後の課題
6. AC広告に関しての自由記述
7. AC広告の効果と期待
8. まとめ

*** はじめに 北海道支部 道南分会の紹介 ***

(社)日本自閉症協会 北海道支部 道南分会は、北海道支部に所属する13分会の一つに位置し、エリアは南北海道で、函館市(人口約30万)と隣接する北斗市及び近隣の16の町からなり、圏域内は車で片道2時間半のエリアである。自閉症者が地域であたり前に安心して暮らすことのできる社会を目指し、地域の人を対象とした公開講座(年4回)・講演会・学習会・自閉症講座(診断まもない会員対象)・懇談会・茶話会(家族向け)・レクリエーション(本人)・広報誌発行(年3回)等を行っており、現在会員は(家族・支援者)約150名で活動している。

*** アンケート調査の目的 ***

平成18年 7月 1日より、AC公共広告機構 支援キャンペーン 9作品の一つに「自閉症」が取り上げられ、全国123社の新聞媒体による広告の掲載を機に、一般の人の自閉症に対する理解がどの程度進んでいるのかを調査し、道南分会が自閉症の啓発活動を推進する上で必要な基礎調査を行うため実施した。協力者は、行政機関・支援機関・一般の人に1345部配布し、回収率77%(1038部)でした。現在その結果は、道南分会ホームページ <http://www.geocities.jp/dounanbunkai2004/>で公開している。

アンケート協力者1038人のうち、5割が仕事上で関わりのある人、5割が一般の人だった。第1弾全体の報告書では、仕事で障害者に関わりのある人(行政関係者・支援者)、一般でも普段障害者と何らかの関わりがある人(ボランティア・保護者同士)、ほとんど関わりがないと思われる一般の人に分けて細かく分析し、道南事情やアンケートの数字では読み取れない地域における現状等も盛り込んだため、報告書が膨大になった。このため報告書第2弾では、一般の人の自閉症に対する認知と理解について、よりわかりやすい形で報告書を作成した。

【 協力機関 】～順不同

行政～北海道教育庁渡島教育局、北海道教育庁檜山教育局、北海道函館児童相談所、北海道渡島保健福祉事務所保健福祉部社会福祉課、北海道渡島保健福祉事務所保健福祉部子ども・保健推進課、函館市教育委員会、函館市福祉部中央福祉事務所障害福祉課、函館市中央福祉事務所子育て推進課、市立函館保健所健康増進課、北斗市教育委員会、北斗市民生経済部健康推進課、北斗市社会福祉協議会、北斗市総合分庁舎、七飯町教育委員会、七飯町役場

支援機関～北海道 発達障害者支援センター あおいそら、渡島・檜山圏域障害者総合相談支援センター めい、障害者生活支援センター ぱすてる、函館障がい者就業・生活支援センター すてっば、おしま地域療育センター、今金町母子通園センター、ファミリーサポートセンター、うみのほし学園、つくしんぼ学級、ちとせ幼稚園、つくし園、七重浜保育園、七重浜保育園、ゆうあい幼稚園、北海道教育大学附属養護学校、北海道七飯養護学校、北海道七飯養護学校 おしま学園、北海道今金高等養護学校

一般～函館市・北斗市・七飯町・今金町在住の地域の人、公開講座参加者、講演会参加者、北海道教育大学函館校学生、看護学生、うみのほし学園の保護者、つくしんぼ学級の保護者、ゆうあい幼稚園の保護者、浜分保育園の保護者、七重浜保育園の保護者、函館どつく株式会社社員と家族、ボランティア

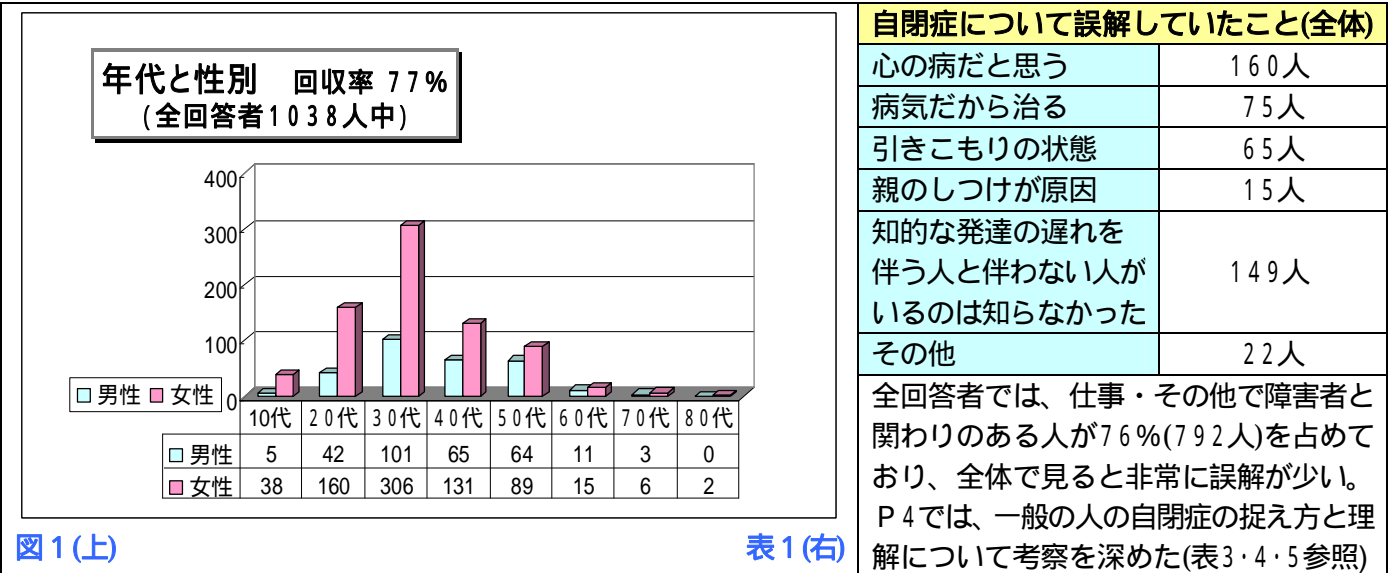
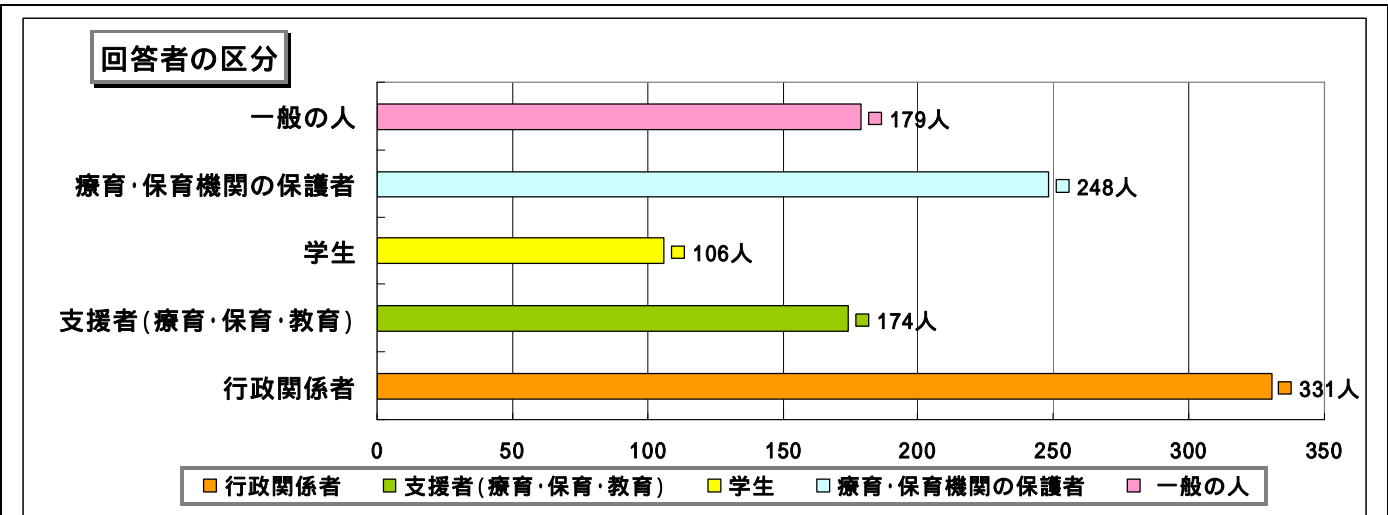


図1(上)

表1(右)

配布は1345部、回収は77%(1038部)、年代では10代~80代までが回答し、20代~50代では全回答者の92%を占め、性別では72%が女性だった。



障害者との関わりについて	人数	割合(%)
A. 普段、障害者と仕事で関わりがある(行政関係者・支援者)	505人	49.0%
B. 普段、障害者とはボランティアや療育・保育機関の保護者として関わりがある	287人	27.5%
C. 普段、障害者とはほとんど関わりがない(一般の人)	246人	23.5%

全回答者ではAの仕事上で関わりのある人が5割、B・Cの一般の人が5割だった。一般の人でも、Bの普段障害者と何らかの関わりがある人、Cの普段障害者とは関わりがない人で分けて分析した。 図2(上)・表2(下)

*** 全回答者の自閉症の捉え方と理解について ***

【設問~AC新聞広告から、自閉症について自分が思っていたことと認識の違いを質問した】複数回答可

自閉症は、親のしつけが原因 病気だからいつかは治る 引きこもりの状態だと思ふ 心の病 知的な発達の遅れを伴う人と、伴わない人がいるのは知らない(高機能自閉症又はアスペルガー症候群) その他の項目に、回答者があてはまると思ったことにチェックを入れてもらった。 については、AC広告では触れてはいないが、あえて項目に付け加えた。チェックが0の人は正しい理解をしている人であり、多い人ほど誤解が多いことになる。回答者全体ではチェックが0の人は、69%だった。これは障害者と関わりのある人が全回答者の76%を占めているため、さらにAの仕事上で障害者と関わりがある人では75%、Bの障害者とは普段ボランティア、療育・保育機関同士の保護者で関わりがある人では78%、Cの障害者とは普段関わりがないと思われる人では47%の人が正しい理解をしていた。ここから先は、一般のデータのみで分析し考察を深めることとする。

*** 一般の人の自閉症の捉え方と理解について BとCについて ***

Bの一般の人(287人)は仕事以外で障害者と接する機会のある人で、 普段障害者に関わっているボランティア 様々な障害児が通園している療育機関の保護者 障害児教育専攻の教育大生だけを想定していた。しかし機関ごとのデータを集計してみると、統合保育を行っている三園(198人)の幼稚園・保育園の保護者は、本来Cの一般票と想定し配布を行ったが、結果はかなりの保護者が障がいへの理解が高いことが判明した。身近で園生活や行事を共にし、園側の啓発活動もあって障がいへの理解が深まったものと考えられる。アンケート配布時の予測と異なる結果となったため、Cの一般票198人分がBに流れる結果になった。

またCは普段障害者とは関わりがないと思われる一般の人(246人)でしたが、そのうち92人の公開講座参加者は発達障害者支援センターあおいそらの講師から講義を受け、道南分会会員の話を聞いた上でアンケートに記入した。回答した時点では正しく理解しており、公開講座開始前にアンケート調査を実施するべきであった。このため公開講座参加者を、一般のデータから除いた154人分のデータ分析を行った。 表3・表4参照

Cの普段障害者とは関わりがないと思われる一般の人

自閉症について誤解していたチェック数は？ 複数回答可(チェックがゼロの人は、誤解のない人) 表3

チェック数	チェック0	チェック1	チェック2	チェック3	チェック4	チェック5	チェック6	記入忘れ
一般 154人中	53人	51人	39人	5人	5人	0人	0人	1人
割合(%)	35%	33%	25%	3%	3%	0%	0%	1%

自閉症の捉え方と理解 ~ 自閉症について誤解していたこと 複数回答可(チェック項目の内容) 表4

【設問】自閉症は だと思っていた (一般の人 154人中)	人数	割合(%)
自閉症は、親のしつけが原因だと思う	4人	3%
自閉症は、病気だからいつかは治ると思う	29人	19%
自閉症は、引きこもりの状態だと思う	27人	18%
自閉症は、心の病だと思う	50人	32%
自閉症には、知的な発達の遅れの伴う人と、伴わない人など様々な人がいることは知らなかった	49人	32%
その他(自由記述)	5人	3%

表3のチェック0の人は、自閉症の捉え方はほとんど同じだったと回答した人。記入忘れの1名に関しては、自閉症の捉え方について少々違っていただけと回答したのに、誤解していた項目にチェックしなかった人である。

表4のその他については、設問項目のチェック以外で誤解していたことを記入した人である。

表3より、一般の人では自閉症について正しい理解をしていた人は、35%にすぎなかった。3人のうち2人は、何らかの誤解をしていたことになり、地域では自閉症理解があまり進んでいないことがわかった。

表4より一般の人、154人中自閉症の原因は、心の病だと思うに50人(32%)、自閉症には知的発達の遅れを伴う人と伴わない人がいることは知らなかったという人は49人(32%)、病気だからいつかは治ると思うに29人(19%)、引きこもりの状態だと思うに27人(18%)、しつけが原因だと思うに4人(3%)がチェックした。しつけが原因だとする人は、障害者と関わりのある人も、関わりのない人も同様に少なかった。道南には、全国的に有名な社会福祉法人侑愛会“おしまコロニー”があり、長年の自閉症者への取り組みや啓発活動の結果が、親のしつけが原因だとする人が少ない結果につながったと思われる。

最高チェック数4には、全回答者1038人中9人がチェックを入れた。そのうち一般の回答者154人中チェック4には、5人がチェックを入れており、チェック4を入れた人の半数を占めた。さらに一般の2機関を考察した。

一般の2機関から自閉症について誤解していたこと(Dは回答者51人・Eは回答者73人) 複数回答可 表5

	しつけ	病気	引きこもり	心の病	知的な発達の遅れを伴う人と、伴わない人がいるのは知らない	その他
D.民間企業	0人(0%)	15人(29%)	10人(20%)	14人(27%)	22人(43%)	1人(2%)
E.看護学生	4人(5%)	12人(16%)	15人(21%)	26人(36%)	21人(29%)	4人(5%)

D機関の協力者は、新造船や船の修理をする会社の製図部門の技術者とご家族に協力を依頼した。回答者は、30代～60代で92%を占め、男性が59%、女性が41%だった。

E機関では10代後半～30代までの若い世代が回答しており、女性が86%を占めた。

両機関から10代～60代までを幅広く捉えることができる。このデータからは、地域の縮小版ともいえる年代層を捉えているため一般の人の自閉症の認知と理解を、両機関からかなりイメージすることができる。

表5よりD・E両機関とも、「心の病」と捉えている人が多く、看護学生では36%、D機関でも27%が「心の病」と誤解していた。

また「病気」と誤解している人も多く、病とは治療によって多くの場合は治癒するという捉え方であり、D・E機関を通してわかることは「病だから治る」という捉え方で社会一般に誤解されていることも判明した。そのほかに「自閉症」という漢字の構成イメージから、人との関係を持たずに「ひきこもりの状態」と誤解を受けやすいこともアンケートの結果からわかった。少数ながらアンケートの自由記述の中には、「自閉症」という言葉に関する見直しをするべきではないかという指摘もあった。

また、「知的な発達の遅れを伴わない自閉症の人がいるのは知らなかった」と両機関とも多くの人が回答した。高機能自閉症については漢字の持つイメージから、“高性能”や“能力が高い”と誤解が生じやすく、一般の人のなかには、高機能自閉症について特別な支援や配慮を必要としない人と誤解してしまう例が報告されている。

*** 調査からからみえてくる 道南分会の現状と今後の課題 ***

看護学生の自閉症や発達障害に関する講義は、各校の指導教官の考えによるところが大きく、小児科一般教養の中で少しの時間で扱う事が多いと聞いた。今回の調査を終えた後、道南分会会員(家族)の小児科医が教官であったため、正しい理解が得られるように自閉症及び発達障害全般について講義を行ってもらうことが出来た。今後は将来医療に携わる者が自閉症に対する正しい理解や認識を持つことで、受診や看護がよりスムーズに行われることが期待できることから、アンケート調査後に函館市内5校の看護学校に広報誌の配布を行い、今以上に自閉症に対しての理解が得られるように、啓発活動を継続する必要があると考えている。

看護学校で実習中の、北海道教育大学函館校 学校教員養成課程 障害児教育専攻3年・4年の学生にも調査を実施した。結果は、全回答者がチェック0で正しい理解のもと教育実習が行われていた。普段から学生は、ボランティアで子ども達に関わっている。看護学生も教員養成課程の学生も共に将来は、医療・教育の分野で自閉症者と関わりが生じる。対照的な回答結果から、障がいについて学び、障害者と実際にふれあう機会があったかどうかの差は非常に大きく、統合保育を行っている三園の保護者のデータからも同様の結果が得られている。Cの一般人(246人)は、大口機関の公開講座参加者、協力機関D、Eと看護学生3年生分の5部を差し引くと、一般人への個人配布はたった25部だった。回収した1038部のうち、一般に個人配布できた数値は全回答者の2%にすぎない。障害者の家族の周りには、身内、同じ障害者の親、支援者、ボランティアが多く、社会との接点が少ないため、一般人の知り合いが非常に少ない現状が今回の調査でわかった。一部に仕事をしている親(自営業を除く)もいるが、母親が仕事を持つためには、子どもが軽度であるか、非常に恵まれたサポートがある等条件がそろわなければ実現しない。同時に障害者の親が社会との接点が少ないのは、道南だけではなく全国の親に共通する問題だと思われる。では障がいを持たない同じ年代の子どもを抱える親たちが、社会との接点をどこで持つのか?多くは、親自身(母親)が仕事をすること、自分の趣味や子どもの学校活動(役員)の中で人間関係の広がりがあると考えられるが、障害者が家族にいと、学校の送迎のことや留守番が一人でできないこと等諸問題があり、母親の就労は簡単には実現できない。普通の家庭では今の時代母親も就労することはあたり前になりつつあるが、母親の就労に関しては子育て支援がなければ難しい。また第一子に障がいがある場合は、一人っ子の家庭も多く必然的に社会は狭くなる。調査を行い、一般の知人・友人が少ないことも、地域への自閉症の理解・啓発が進まない大きな要因となっていると推察できる。

*** AC 広告に関する自由記述 ***

63%の人から自由記述に協力をいただいた。内容の多くは、大半が今回の啓発活動に賛同し継続を希望する意見、広告の内容について踏み込んだもの、少数ながら道南分会への要望と応援メッセージの3つに大別された。

*** AC広告の効果と期待 ***

テレビCMで「AC～」という音楽で思い出す人も多くいると思うが、AC公共広告機構のもつ使命は、社会と公共の福祉に貢献することで知られており、「地球の環境に関すること」や「人の命」という重く大切な心を揺さぶるテーマを中心に長年社会貢献をしている。その一つに、今年度「自閉症」が取り上げられたこと、ACというネームバリューの重みと恩恵を受けて調査ができた。アンケート調査と並行し、公共広告機構と電通中部支社と北海道新聞社には、メールやお礼状を送付したことで、ACからは温かな応援メッセージが届き、後には制作者の思いを広報誌9号へ掲載した。報告書完成後には、北海道新聞(3月6日)と北海道通信日刊教育版(3月15日)の二紙が報告書のことを記事にして下さったことで「理解啓発」をさらに促進するものと感じた。効果はすぐに目に見える形では表れにくく、メディアを利用した啓発活動については長期的に取り組む中で見えるものと、意識などの変化は、目に見える形でなかなか表れないものがある。また、各地域の啓発活動と連動しており、結果と考察は道南分会と同じ結果になるものと、地域により異なるものもあると考えられる。今後の課題は、啓発活動について日本自閉症協会でも共通する課題と、地域での課題が別にあると考えられるため、各地域でも同様の調査が行われるとよいと思う。

今後の啓発については関わり方の違いにより啓発の質が異なるため、長期的な展望を持った上で計画的に取り組む必要があり、さらに一般の人への啓発については、今回アンケートに協力してもらうことがすでに啓発活動だった。今後機会があれば配布先を拡大し一般票を集めることが啓発の鍵だと思った。現在は協力機関へのご挨拶も終え(大口でご協力いただいた機関には一機関としてのデータと自由記述内容も添えて)、報告書に目を通していただき、道南分会へ期待や啓発への提言を頂戴し、ご意見を集約しさらにステップを踏みたいと考えている。

*** おわりに アンケートのまとめ ***

1. 一般の人では、「心の病」・「病気だからいつかは治る」・「引きこもりの状態だと思ふ」と回答した人が多く、「自閉症は、生まれつきの脳の機能障害」であることは、正しく理解されていなかった。自閉症という言葉は耳にするようにはなったが、地域ではまだまだ自閉症への誤解が多い。また、知的な発達を伴わない自閉症(高機能自閉症又はアスペルガー症候群)の人がいることは、あまり知られてはいなかった。
2. 一般の人への啓発が進まない要因に、母親の多くが障がい起因する様々な理由から仕事を持つことができなかった。そのことにより、必然的に社会との交流範囲が狭くなり、同世代の親たちに比べると一般の知人・友人が少ないことが判明した。一般の人への自閉症の認知と理解が、なかなか進まない要因の一つと考えられることから、社会との接点が少ないため、個人レベルでは啓発はなかなか進まず、分会・支部・協会として同じ問題意識を持ち、啓発活動を進めるべきである。
3. 今回の調査で「自閉症は生まれつきの脳の機能障害であることは理解した。次はどのように関わったらよいのか?」といった、次のステップにいくためにどうしたらよいのかという、啓発活動の中身への問いかけがあった。さらに一般の人・子育て中の保護者・ボランティア・支援者・教員・行政の担当者、それぞれにより理解啓発の質が異なり、長期的に段階を踏んで取り組む必要がある。AC公共広告機構支援キャンペーンに選んでいただいたことで、全国で同じ問題意識で啓発に取り組むよいタイミングであると思った。

調査を終えて、アンケートに協力してもらうことが一般の人への啓発活動の一環であり、道南の現状と課題がともよくみえた。それぞれの関わり方により、啓発と自閉症理解の求められている意味・質・専門性が異なることがより鮮明になった。社会は、まだまだ私たちにとって開かれているとはいえないが、私たち親が発信し続けることで、地域を変えられると信じ、子どもと共に地域で歩んでいきたい。私たち親にとって、子どもたちの未来に何かを残してあげられるとすれば、それは人という財産を残し次へと人をつないでいくことではないかと思う。今回、啓発とは何かを改めて考え、認識できたことを今後の道南分会の活動につなげたい。

おわりに、社団法人 公共広告機構の関係者の皆様、株式会社 電通中部支社の制作者の皆様、全国の新聞社の皆様と、広告に協力して下さったひろと君とかねすけ君とご家族の皆様、そしてアンケートに快くご協力下さった道南の多くの関係者の皆様に、深く感謝申し上げます。

2007年 3月